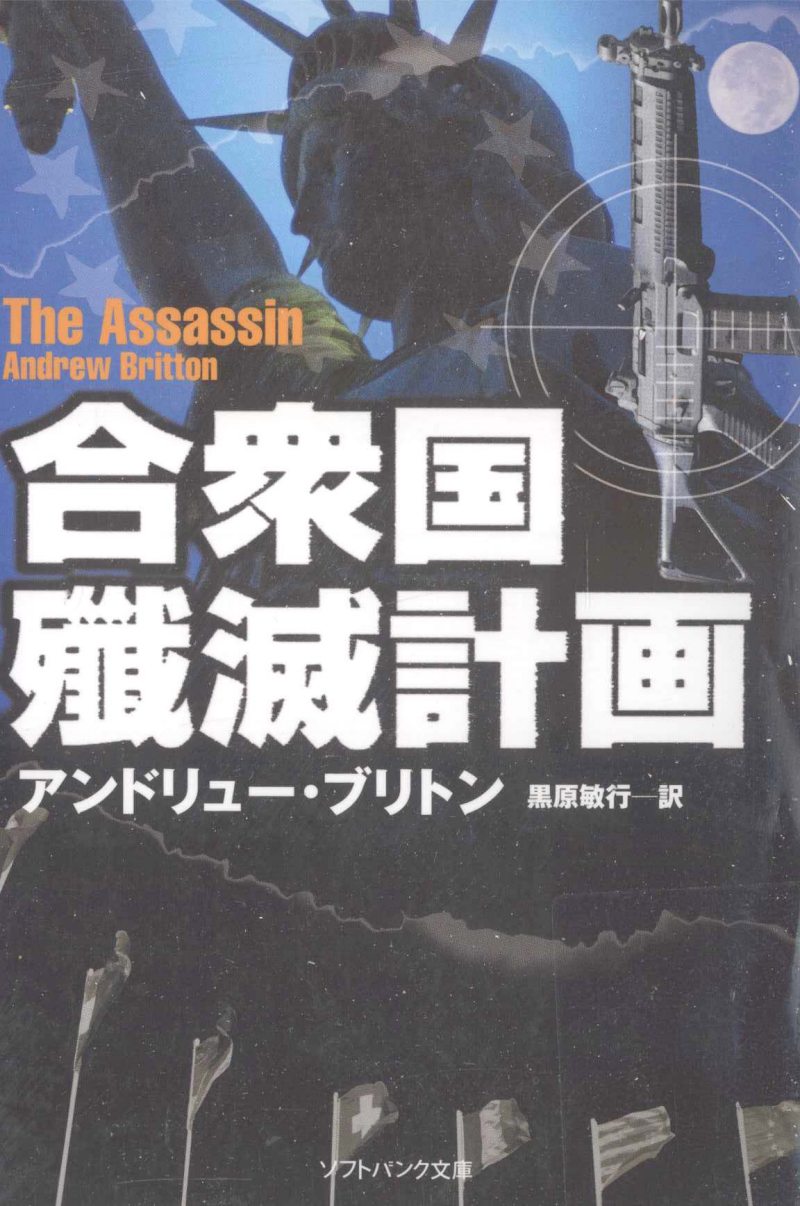




The Assassin
Andrew Britton

合衆国 殲滅計画

アンドリュー・ブリトン 黒原敏行一訳

SB文庫

がつしゅうこく せん めつ けい かく

合衆国殲滅計画

2007年6月30日 初版発行

著者 アンドリュー・ブリトン

訳者 くろはらとしゆき
黒原敏行

発行者 新田光敏

発行所 ソフトバンク クリエイティブ株式会社

〒107-0052 東京都港区赤坂4-13-13

電話 03(5549)1201(営業部)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

デザイン ヤマガチタカオ

フォーマット・
デザイン 米谷テツヤ

本文組版 谷敦

落丁本、乱丁本は、小社営業部にてお取り替えいたします。

定価は、カバーに記載されております。

本書に関するご質問等は、小社文芸書籍編集部まで
必ず書面にてお願いいたします。

© Toshiyuki Kurohara 2007 Printed in Japan

ISBN978-4-7973-4021-1

江苏工业学院图书馆

藏書章
リユ ブリ
黒原敏行 訳



THE ASSASSIN
by Andrew Britton

Copyright © 2007 by Andrew Britton

Permission for the edition was arranged with Kensington Publishing Corp.
through The English Agency (Japan) Ltd.

登場人物

ライアン・キーリー	C I A エージェント
ネイオミ・カルマイ	C I A 情報分析官
ジョナサン・ハーバー	C I A 国家秘密局長
ロバート・アンドリュース	C I A 長官
レイチェル・フォード	C I A 副長官
サマンサ・クレイン マット・フォスター	F B I 捜査官
パトリック・ランドリュウ	
	国家テロ対策センター 所長
デイヴィッド・ブレンマン	アメリカ大統領
ヌーリ・アル・マリキ	イラク 首相
ナシル・アッ・ディン・タブリジ	イラク 外相
アルシャド・アブドウル・カッセム	イラク 元共和国防衛隊 大尉
イザット・イブラヒム・アッ・ドゥーリ	イラク 元革命指導評議 会副議長
トーマス・リューマン	実業家
マフムード・アフマディネジャド	イラン 大統領
アンソニー・メイソン	武器密輸の容疑者
アミル・ナゼリ	運送会社社長
ウィレム・ヴァンダーヴィーン	テロリスト
ヤスミン・ラシーン	ヴァンダーヴィーンの 相棒

プロローグ バグダッド

アニタ・ザイドは腕組みをして、バビロン・ホテルの天井の高い広々としたロビーの向こうを睨みつけた。自分のこの怒りがある種の熱病となって、あの女に感染すればいいのにと願うのは、これが初めてではない。ネットワーク局の過度に華麗な、いつもこちらを出し抜くリポーターにだけ感染する熱病だ。もっといいのは、こちらの威嚇的な視線のせいであの女が無意識のうちに萎縮して、カメラの前でしゃべるたびに舌をもつれさせてしまうという事態だ。そんなことを考えて、アニタは一瞬内心でにんまりとしたが、それが望みえない贅沢であるのはわかっていた。残念ながら、あそこにいるペニー・マーシャルは、まだ若手ながら、プロ中のプロの技量でテレビ報道の現場の強烈なプレッシャーに打ち勝つ女との評判をとっている。

今回は完璧にスクープが抜けるはずだった。アニタにはとびきりの情報源があったのだ。イラク国防省に勤める従兄だ。重要な情報にアクセスできる男で、買収するのに金がいると

言えばアニタの上司は快く経費として認めてくれただろう。だがこの点でも、アニタはついていた。従兄から話を訊きだすには、バグダッド郊外の慎ましい家をとどこぎ訪ねるだけでよかった。従兄はその家で妻のまづい料理のことを愚痴り、アメリカ人についてやんわりとではあるが延々と文句を言いつづけて、病気がちの妻を嘆かせるのだった。従兄からの最新情報はつい四十分前に入手したが、そのときアニタは即座に行動するのにうってつけの場所にいた。米軍管理区域にあるカフェで冷めたコーヒをちびちび飲みながら退屈しきっていたのだ。相棒のアメリカ人カメラマン、ティム・ホフマンも一緒にいた。その二十分後、何か所かの検問所であらわれて苛々させられたあとで、ジャドリヤ地区の緑の多い住宅地にやってきた。周囲の環境とは不釣り合いだが、バビロン・ホテルはそこにあるのだった。

みるみる人で埋まっていくロビーで、空いた場所を探しながら、アニタは髪を顔の前から払いのけ、つるすけ立ちにため息をついた。ロンドンを本拠地とするインディペンデント・テレビジョンに勤めてもう五年。長時間労働と安い給料にあとどれだけ我慢できるだろうと思いはじめている今日この頃だ。中東特派員という仕事は適職ではあった。イラク北部の都市モスルで生まれ育ったからだ。十七歳でイギリスに移民し、ケンブリッジ大学で英文学を専攻して、優秀な成績で文学士号を取得した。普通に考えれば、燃えつきるにはまだ若すぎる。それは自分でもわかっていた。なんといってもまだ三十六歳になったばかりだ。だが、もっと給料がよく過酷でない勤め先があるはずだと思わずにはいられない。最近ではステップアップへの欲求が強まる一方で、今日のような取材にはうんざりするばかりだった。

いまいましい事態はホテルに到着してすぐに始まった。支配人がホフマンの提げている撮影機材の黒い大きなケースを見て、ロビーで取材するなら「場所代」を払うようにと要求してきたのだ。小遣い稼ぎの意図は見え見えだし、意外なことではなかった。アニタは米軍に統治される前のイラクの流儀をよく知っていた。買収は例外的なことではなく原則だった。イラク戦争に先立つ数カ月間、フセイン政権の情報省は欧米諸国のジャーナリストの取材活動に厳しい制約を課していたが、アニタはたちまちこつをつかんだのだった。もちろん、局のしまり屋の経理担当者とは何度か熱い議論を戦わせたのだが。

不運にも支配人は即金での支払いを要求してきたが、アニタには持ち合わせがなかった。

こうして手間取っているうちに、ペニー・マーシャルの部屋へ知らせが行った。マーシャルはニュージールランド出身のブロンド女性で、年は二十代、CNNの今をときめくスター記者だ。何かあるらしいと知ったマーシャルは、ものの三分であたふたとロビーに降りてきた。しかもたった今メイク室から出てきたばかりという顔で。彼女がこのホテルに投宿しているのはまったくの偶然だった。カメラマンも数分遅れで降りてきた。それが二人もいることを知ると、アニタは嫉妬にチリリと胸を焦がしたものだ。どちらもビール腹のむさくるしい服装の男だった。三人は派手に声を張りあげて場所取りの交渉を始めたが、これこそはアニタが絶対に起きてほしくないと思っていたことだった。カメラクルーが二組いることで堰が切られて、重要人物の登場は街中のジャーナリストの知るところとなった。一番わりを食ったのは明らかにアニタだった。ここならまずまずの絵がとれると思った場所は、CBSニュー

スの四角いカメラや現地特派員のぼさぼさ頭でふさがれてしまった。

「アニタ、もっといい場所を探そう」とうとうホフマンが手持ちカメラの脇にひげ面を出した。「ここからだ、被写体がフレームに入ってるのはせいぜい五秒だ。それも運がよければね。しかもインタビュはむりだろう。これだけ人がいるとこっちの声が届かない」

アニタは脇を向いて腹立たしげに目をぐるりとまわした。ホフマンはアメリカのニューハンプシャー州出身だが、イギリス風の言葉遣いをする。パートナーを組んだところは、冗談でこちらに合わせているのだろうと気にしないようにしていたが、二週間ほどたつと、イギリス系の血筋を真剣に誇りとしているのがわかり、げんなりしたものだ。それは滑稽だからやめたほうがいいと何度か忠告したが、今は聞き流して、どこから撮影すればいい絵がとれるか考えはじめた。二階のバルコニーはだめだ。角度がよくないのはここからでもわかるし、階段の上り口をすでに数人の警備員がふさいでいるようだ。それにかなり引いた絵になるのもよくない。現場の外にいる感じになるだろう。もっとも皮肉なことに、人垣から離れること自体はいいことだ。視聴者は興奮の渦の真っ只中にある臨場感を求めるが、よそとは違う映像も好むからだ。この二つの妥協点を見つけるのは不可能に近いのだが。それはともかく、ホフマンはあまりやる気がないようだ。

「でもまあ、あの男は来ないんじゃないかな」とホフマンはだるそうに言った。「マスコミが来ると知ったらゾーンから出ないだろう。かりに来るとしたら、もう一時間前に来てるはずだよ」

「絶対来るって」アニタは自分のなかでも湧いてくる疑いを押しこめた。スンニ派主体の反政府武勢力はこのところ意外なほど鳴りをひそめているが、テロは二〇〇三年以来着実に増えており、その増加率は年に約十四パーセント。脅威が増すにつれて、バグダッド市内の主要なホテル——とりわけ欧米人が多く宿泊するホテル——は警備体制を大幅に強化している。それでも、なお危険は存在するのだが。「このホテルはまるで要塞よ、ティム。外のゲートを見なかった？ それにあの男にはボディガードや警察の警護班がついてるし……きつと来るから。まあ見てて」

アニタが取材位置を探しているあいだ、ロビーからはたえず無線電波が外に飛んでいた。ホテルの左右に約三百メートル延びているアブ・ヌワス通りの両端に、警備ポストがすでに設置されているのだ。ホテル内ではイラク警察の私服捜査員たちがあらかじめ張りこんで取材陣を監視していた。この先遣隊のメンバーは宗派と政治信条を念入りに調査されて選ばれていた。全員がシーア派イスラム教徒で、ほとんどがダワ党の黨員。要するに警護される人物と同じだった。二階にいる捜査員たちは一階にいる人の群れをたえず見張っていた。不審な動きはないかと目を光らせながら、無線機に声をささやきこむ。その声がこちらに向かいつつある車列の先頭車両に直接伝わるのだ。

先遣隊が報道陣の監視を始めて五分後、バビロン・ホテルの玄関前で黒いフォード・エクスプローラーがタイヤを軋^きらせて停止した。ドアが開いて、四人の警護担当員が降り立った。

各自がアメリカ国防総省支給のM4A1カービン銃とベレッタの拳銃M9を持っている。四人のうち二人は通りの向かいへ行き、二人はホテルの玄関前を守る位置についた。次に到着する車両を防御するためだ。これはアメリカ国務省の外交保安局が長年のあいだに完成させた近接防護テクニクである。アメリカ人から訓練を受けたイラク人警護陣は迅速かつ正確にこれを実施し、安全を確保すると、専用周波数を使う無線機で連絡を入れた。まもなく白いメルセデスのセダンが現われた。車高の低い車は歩道脇で静かに停止する。警護員がドアを開け、なからその人物が降りてきて、地雷原を進むように注意深く水溜り^{みずたまり}を避けて歩きます。たちまち警護員たちが周囲を囲んで、その人物は見えなくなった。

ホテルのロビーで、アニタが報道陣の群れの外側を移動していると、ふいにその群れが前に押し進んだ。言葉の聞きとれない質問が乱れ飛ぶ。

「くそっ」とホフマンが言った。「おい、おれたちも——」

「だめ！　ここで撮るのよ」アニタは場所取りの失敗に腹を立てながらも、この位置を最大限に生かそうと決めた。人垣に背を向け、一続きのすばやい動きで髪を整え、マイクのテストをし、スカートの皺^{しわ}を伸ばす。「秒読みして、ティム。いい？　うまくやりましょ」

ホフマンがカメラを肩にかつぐと、アニタは身も心も自分のよく知っているモードにすつと入るのを感じた。熱意に抑制をきかせ、両肩をうしろに引き、顎を心持ちあげる……冷静沈着なプロフェッショナルだ。これがこの仕事の一番いい部分であり、レンズを見つめなが

ら頭のなかで出だしの作文をしていると、自分がこの仕事を愛している理由がよくわかる。

「よし行くぞ、五、四——」

ホフマンの声が、頭上で起こった突然の轟音^{ごうおん}にかき消された。壁に囲まれた建物のなかで、音は奇妙にこもって聞こえ、アニタにはすぐにはその正体がわからなかった。どうやら誰にもわからないらしい。みんなは当惑顔で上を見た。だが、ボディガードたちはすでに警護対象を玄関のほうへ連れ戻しはじめていた。音は雷鳴にも似ていたが、もっと鋭く、さほど長く尾を引かず……。

そのとき、二度目の爆発が起こった。

右を見ると、怖ろしいほどくっきりと見えた。大きな火の球が東側の階段吹き抜けから噴きだし、ペニー・マーシャルとそのクルーとそのそばにいた十数人を呑みこみ、オレンジ色の大輪の火の花を咲かせた。反応する暇もなく、アニタは何か硬く熱いものに突き飛ばされ、身体の作りが予定していない角度に手足をねじ曲げられた。

床に落ちたときは、きれいに落ちず、右腕を何かに切り裂かれたように感じた。一瞬気を失って、また意識が戻ったとき、最初に感じたのは痛みだった。ただの痛みではない、純粹な激痛だ。

痛みは全身にあった。だが、どれだけひどい怪我をしているにせよ、自分の怪我のことよりも、周囲に見えるものが意識を満たした。なぜか音は聞こえなかった。沈黙のなか、悪夢のカラージュが目の前で展開した。血まみれの腕、空^{くう}につかみかかる指、大きく開いて無音

の叫びをあげる口、東側の階段吹き抜けの近くにいた人たちの炎をあげながら踊る姿。

あまりにも凄まじい光景が、あまりにも唐突に出現していた。アニタも恐怖と苦痛の悲鳴をあげようとしたが、声は喉につかえて出なかった。怖ろしい光景を締めだすため、目をぎゅっと瞑ろうとしたが、もう遅すぎた。それは脳裏に焼きついていった。そして、それではまだ不足だというように、ある捉えがたい情報が彼女の無意識に呼びかけて、もっと深刻な問題の発生を知らせようとしていた。

やがて気づいたのは、もう痛みがないということだった。

その自覚が、恐怖の波となって襲ってきた。痛みがないなら、もうだめだ……どこから出てきたのかわからないが、その言葉が怖ろしい呪文のように何度も何度も頭のなかで繰り返された。そしてそのとおりだと思った。痛みがないなら、もうだめだ。痛みがないなら……

…

なんでもいい、何か感じたい、そう必死で願ったが、周囲がすでに遠のきはじめていた。闇が満ちはじめたときには、上から落ちてくるものが本物なのか、パニックの誘発する幻覚なのか、わからなくなっていた。天井から落ちてくる漆喰や大理石の破片は、最初は小さかったが、じきに大きな重い塊となり、血まみれの床に激突しはじめた。

ほんの数秒後には、もう誰も踊らなくなった。黒い人体はオレンジ色の花輪に包まれてじっと横たわっていた。アニタは両腕を動かそうとしながら、崩れた正面玄関とその向こうの屋外に目を据えたが、どうにもならなかった。

それから突然、首のうしろに鋭い衝撃が来て、すべてが闇のなかに閉ざされた。

1 ワシントンDC

都市の空に夕闇が迫り、雨を含んだ雲が灰色の光をにじませているなか、黒いリンカーン・タウン・カーがポトマック川沿いのジョージ・ワシントン・パークウェイを疾駆していた。助手席に乗ったジョナサン・ハーパーは川を眺めていた。黒い川面の上には街灯の弱々しい黄色い光。ハーパーの目は風景に据えられているものの、頭はまったくべつの場所について、四時間前にオフィスに入ってきたニュースのことばかりを考えていた。そのせいでラジオが小音量で流している地元のニュース番組にはほとんど注意を払っていなかった。だが、報道内容が自分自身の物思いと一致しはじめると、手を伸ばしてボリュームをあげた。

バグダッドでは今日、アメリカ軍とイラク軍が嚴重な警戒態勢に入っています。街中で検問所が増設され、アメリカ国務省によりすでに出されている渡航者への警告が更新されました。これは首都で起きたヌーリ・アル・マリキ首相暗殺未遂事件を受けての措

置です。現地時間で午前十二時十四分ごろ、インターナショナル・ゾーンのすぐ南に位置するパビロン・ホテルで、二カ所に仕掛けられた大量の爆薬が爆発し、二階と三階が損壊。アメリカ大使館の話では、ほぼ同時に起きた二度の爆発のあと、首相は一命をとりとめたものの、重態と見られている模様です。現在入っている情報によれば、米軍に同行して取材をしていた報道関係者を中心とする二十五人のアメリカ人民間人の安否が未確認ですが、おそらくは爆発のため死亡したものと思われます。

今日ホワイトハウスで行なわれた記者会見で、デイヴィッド・ブレンマン大統領は爆破テロを強く非難し、被害者の家族に対して慰めの言葉をかけました。これに加えて、やや意外な発言ながら、大統領はイラク駐留米軍削減の意思をあらためて宣言しました。これは再選をめざす大統領の重要な公約の一つであり、五年間で駐留軍を段階的に撤退させるというものです。大統領の計画にはイラク十八県のうち四県の治安維持権限をこの四月までにイラク政府に委譲することが含まれていますが、民主党はこれではペースが遅すぎると批判しています。しかし今回の事件で、大統領は米軍兵士の家族への約束を撤回せざるをえないのではないかと見られており、十一月の大統領選における大きな打撃となることはほぼ確実のようです。

さて次の話題ですが、ベイルートで行なわれていたデモは昨日、中止に追いこまれました――。